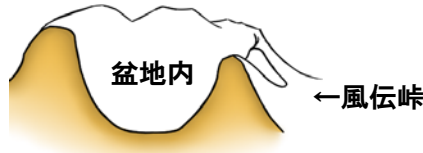


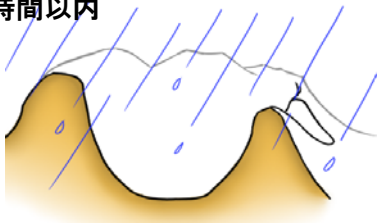
風伝おろしのメカニズム

風伝おろし発生には二つの原因があると考えられます。その発生の仕方によって、若干風伝おろしの形状が変わってきます。二つの発生の違いには、雨が大きく関わってきます。風伝おろし発生前、だいたい24時間以内に雨が降ったかどうかによって発生の仕方が変わってきます。私たちは、24時間以内に雨が降り、大気が十分に湿った状態で発生する風伝おろしを「高湿度タイプ」、雨から24時間以上経ったものを「放射冷却タイプ」と名付けました。まず、それぞれのタイプの霧の発生の仕方をみていきます。



「高湿度タイプ」

24時間以内

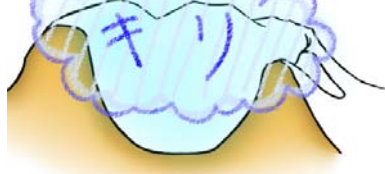


雨により



盆地内の空気が十分に湿っている。

日没後～明け方

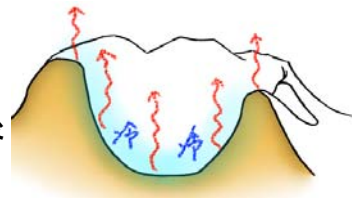


そのため、日の入り後の少しの気温低下で盆地内に霧が発生します。

雨の翌日の朝に現れる風伝おろしはこのタイプが多いです。

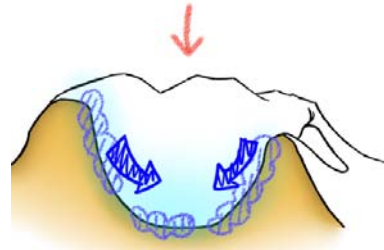
「放射冷却タイプ」

日没後



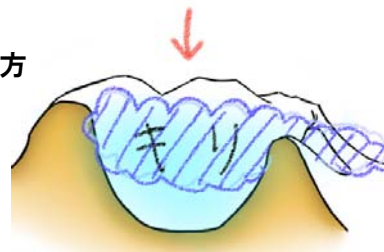
夜間の放射冷却によって山肌の空気が冷やされ、霧が発生する。

夜間



その霧が冷氣流と共に盆地内に供給される。(冷氣湖とともに霧が発達する。)

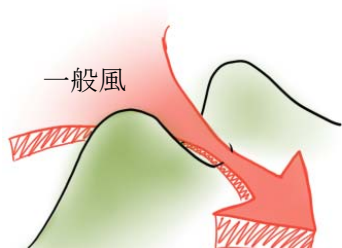
明け方



峠を越える高さまで霧が発達すると風伝おろしとなる。

盆地内で発生した霧は、盆地外に流れ出てきます。その原因として、「地峡風」と「重力流」があげられます。この二つが単独もしくは合わさって、盆地外へ霧を流出させます。

「地峡風」



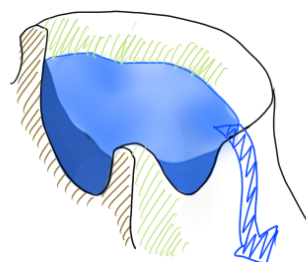
風伝峠などの谷地形を一般風が抜ける時、ジェットのように吹き出す風を地峡風といいます。

この強風と共に、盆地内の霧が風伝おろしとなって盆地外に流れ出てくると考えられます。

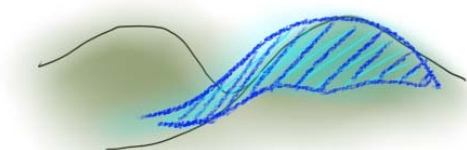
この一般風にあてはまるものとして、冬季は北西季節風、暖候期は紀伊山地と太平洋が生み出す陸（山）風があげられます。

「重力流」

冷たい空気は重いため、夜間盆地内に溜まった冷氣（冷氣湖）が霧と共に盆地外にあふれ出す現象が起こると考えられます。放射冷却タイプでは盆地内と盆地外で約2℃の気温差がみられており、十分に重力流が発生すると考えられます。しかし高湿度タイプでは、放射冷却がおきにくく気温差があまりみられないときもあり、そのようなときは重力流が発生しにくいと考えられます。

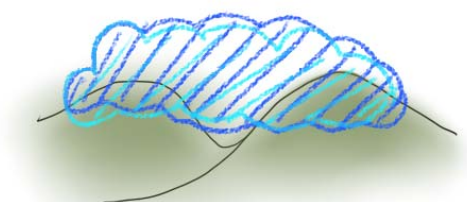


～風伝おろしの形状～



「放射冷却タイプ」

冷氣湖と共に発達するため、霧は山をわずかに超える程度しか発達しません。盆地内の大気が冷たいことが多いので、山肌を流れ下るように盆地外に霧が流れ出てきます。



「高湿度タイプ」

冷氣湖に関係なく発達するため、山を大きく越えて覆いかぶさるように霧が発達することが多いです。盆地と中と外で気温差が生まれない事があるため、流れ下る様子が見られないことがあります。

楠 直大 作 (2008年3月修了、現：ウェザーニューズ)